

■岐路に立ちて (四卷)

帝キネ現代映話

原作者 寺山 善六氏
改作兼監督者 深川 ひさし氏
撮影者 山中 虎男氏

主要役割

女中 おさこ 千草 香子嬢
職工 村田 要吉 岡田 時彦氏
車夫 村田 平助 林 誠 太郎氏
工場主 木庄 新兵衛 牧 野 睦氏
息子 新太郎 藤間 林太郎氏

妻 よし子 松本 この六嬢
娘 勝子 山下 澄子嬢
友人 友代 歌路 英子嬢

ハ略筋。本庄職工所の一職工に過ぎないけれど、要吉にはおさこ云ふ美しい花があつた。おさこは本庄家の召使で、要吉は或る時友の犠牲となつて解雇されおさこ悲しい日々を續けた。本庄家の一子新太郎は或る夜酒の勢を借りておさこを犯した。征服されたおさこはそれから新太郎を慕ふ様になり何時か要吉の事を忘れて居た。然し新太郎の戀は遊戯的であつた事を知つておさこは絶望的に家出した。そして既に死を求めんざした時、運命は皮肉にも要吉の父におさこを救はしめた。おさこが不義の子を生んだ時、要吉は成功して歸つて来た。おさこは良心の苛責に耐へかねて發狂し、要吉も亦氣も狂はん計りになつて雪の街を彷徨ふのであつた。

資本家の横暴と弱者の悲哀を描いた譚りであるが、忽ちその筋の忌諱に觸れて、大分カットされた様に思はれる映話である。然し全體から見ると大してそれを鋭く描いたものではなく、至つて拙ない脚色であり監督であるからカットされなくとも左程見應へのする映話ではない俳優も平凡で頼りない。岡田時彦氏の要吉も悪い趣味のみ露骨に出て、其の演出が更に見出せなかつた。撮影も普通程度である。――山本 綠葉――
興行價値――餘り香ばしくはあるまい。観客を引付ける力を多く持たない映話である。

(三月十九日 大阪芦邊劇場)